

高津川試験池種苗生産試験

梶 田 恭 道

県西部の鯉種苗生産及び配布を行ない、併せて淡水魚の養魚指導と普及を行なうことを目的とした。なお、本年度は二才魚及び当才魚を重点にして生産を行なった。

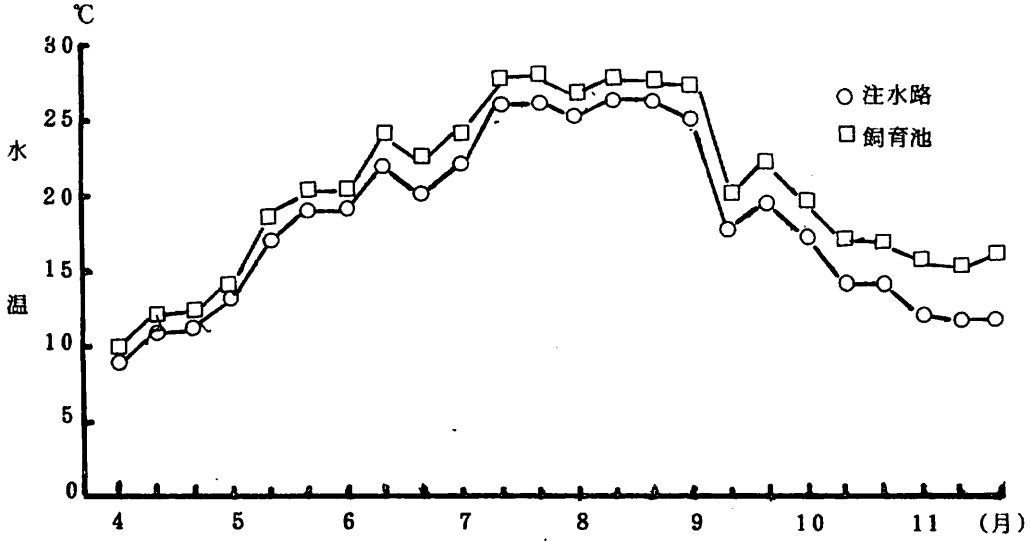
結 果

施肥 飼育池(500 m^2)3面及び小型養成池数面を使用し、5月16日毛仔の初期餌料となるミジンコ(*Daphnia pulex*)を発生させる為、1面当り15袋の鶏糞を散布した。当初ミジンコの発生が悪く、カイミジンコ(*Herpctocypris* sp)が大量発生した。原因は、水温が15℃~16℃であり、また水色が半透明でまだ水が出来ていないためだと思われる。ミジンコは毛仔の初期の生長と歩止まりを大きく左右するため絶対に必要である。5月18日追肥として1面当り3袋鶏糞を投入し、攪拌した。5月25日には全池ともミジンコの発生が池全体に見られ、カイミジンコの姿も減少した。

採卵・ふ化 5月17日、予め産卵池に水を張っておいたため水温は18℃~19℃と高くなった。さっそく魚巢を吊り、親魚の選別にかかった。親魚の大半はエピスティリス(*Epistylis lohgi* *ohpora*)症が発生しており産卵に対して不向であったが、健康魚を選んで採卵を行った。この1回の産卵を確実にこなわなければならない。5月18日選別した親魚を産卵池に入れ1晩事務所から見守った。産卵は良好で、ふ化期間中に水生菌の発生を防止する為に、20日・22日に5ppmのマラカイトグリーンによる30分間薬浴を行なった。5月26日ふ化し始め、5月28日にはほとんどの卵がふ化した。ふ化率は約60%で推定180,000尾とみなされる。5月29日毛仔を飼育池に放養した。放養に当り前もってピーカーに飼育池の水を取り毛仔10尾を入れ観察した。

生産 毛仔放養後3日目より水餌を給与した。水餌は鶏卵の黄身を布ごしした物に、粉末配合餌料、小麦粉を調合し水に浴いたものを、池壁周辺に1日2回散布した。6月8日早く毛仔が餌に寄るように吊餌を始めた。7月18日鰓ぐされ発生の為、ダイメトン散の経口投与を行なった。7月20日給餌をクランブルに変えた。8月3日選別し養成池数面に分養した。また三刀屋分場より10万尾を移入したのも、飼育池で30~35gにして養成池にふりわけた。8月下旬に、トリコディナ(*Trichodina*)症が発生、斃死が目立ったので、ホルマリン20ppmで、40~50分間の薬浴を行ない、駆除した。

旬別平均水温は図1に示した。



第1図 旬別平均水温

配布 当才魚は放流用、二才魚は流水池用の種苗として配布を行なった。当才魚15,000尾、二才魚8,140Kgを流水用として配布した。

指導 養魚指導は主にスッポンに関する病気と採卵・ふ化について実施した。また、併合して高津川系の養鯉の指導及び魚病診断に関する相談に参与した。